

Gaspard du Crépuscule

黄昏のガスパール

Entre la vie et la mort
— い の ち の あ わ い —

それは、すべてを放擲した涙の雨。
淡くて遠い、星々の最期。

止まない雨に打たれながら、
貴方は星を探すでしょう。

甘き泡沫に黄昏を。

「汝、昏き死を待つ命」



宗教

→死の痛みを軽減
死後の世界のイメージ



医療

→寿命を「医療の限界点」
まで延命

1-1. 命という原罪 / 「present」

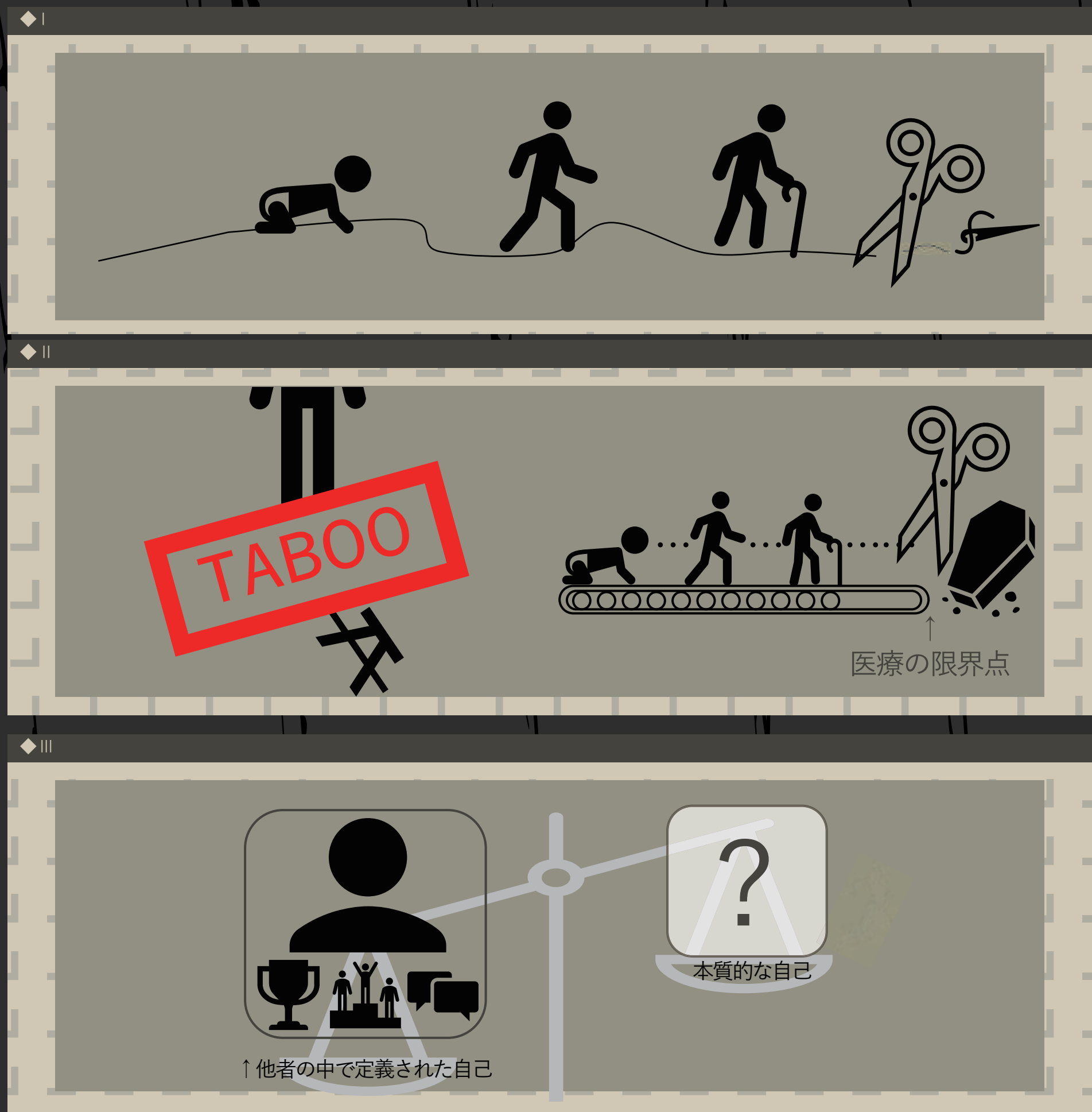
ヒトは唯一、自分の寿命、つまりある程度の未来と必ず訪れる死を把握しながら生きていると言われている。

選択肢や分岐点を前にして、未来や死から逆算する形で思考は働かされるが、未来はいつだって不定形で、命は常に瀬戸際を流れており、得てして不変恒常なものだと思込まれている。

私達は、わからないものを起点に、そして社会という逃れようのないものを足掛かりに、逆算をしながら（させられながら）生きている。

近代以降、死は宗教や共同体の支配から、医学と国家の支配する領域へと変化した。「死ぬ権利」は暗黙の禁忌、「生きる義務」が公然の規律として成立しており、死は「自然な終末」としてではなく、「医療の限界点」として定義されている。

死の概念やそれに伴う恐怖、痛みは、宗教によってやわらげられ、医療の発展によって遠ざけられてきたが、宗教への親しみが失われ、寿命は医療の限界点まで迫った現代において、死は単なる生命の断絶以上の意味を持ちにくく、その痛みと向き合うための最大公約数的な答えを私達は持ち合わせていない。



1-2. 声無き 慟哭 /for dying

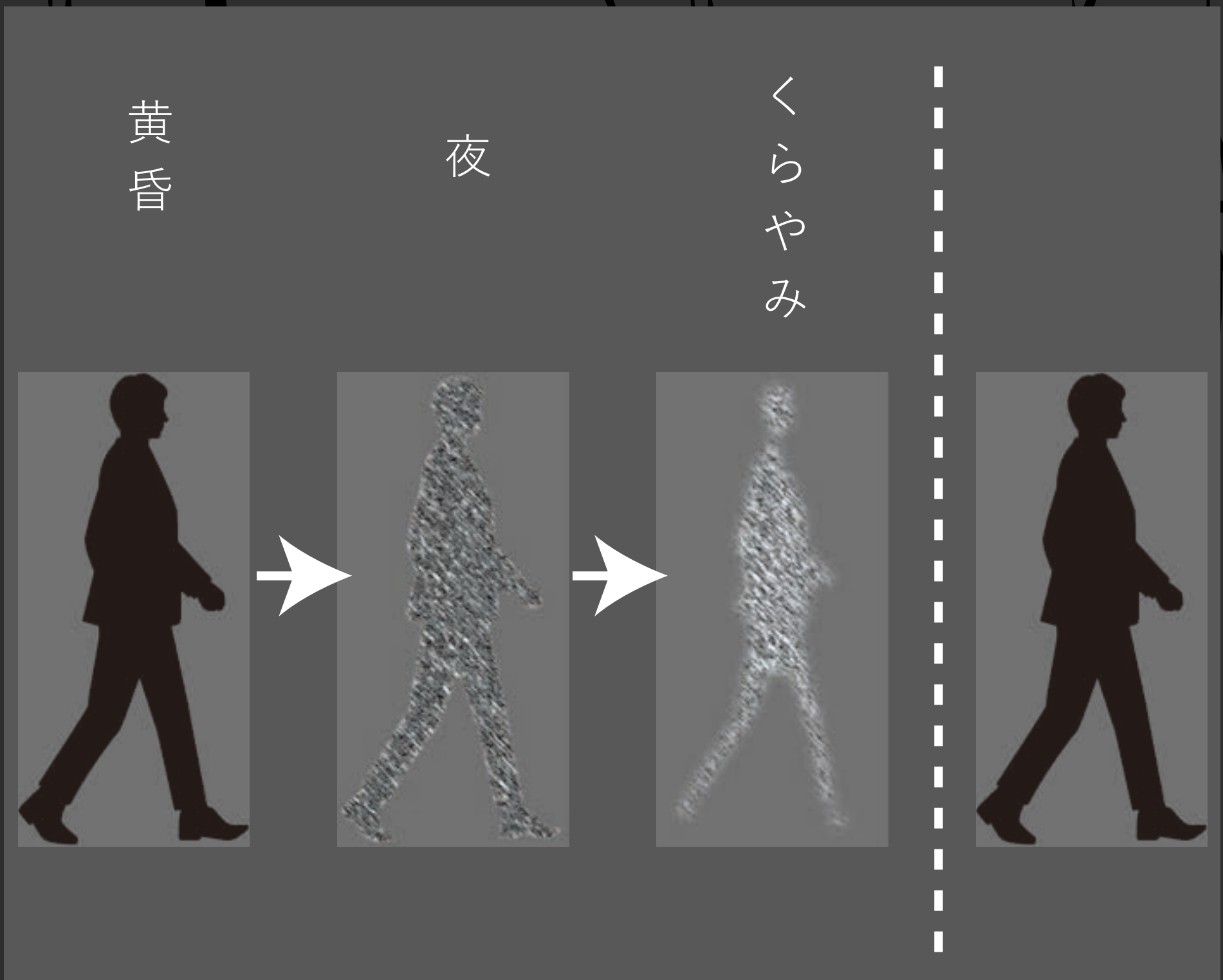
現代の情報社会において、個人は常に他者の視線に晒され、関係性は途切れることなく持続する。主語が不確定でありながらも個人への指向性を持ち得ることばかり「自己」は逃れられず、「他者の中で定義された自己」だけが肥大化していく。

その結果、「生きること」そのものよりも、生き続けることを想像する負荷や、社会的自己を維持し続ける重さが、個人を圧迫する状況が生じており、ときに人を苦しめ、ときに人を押し潰してしまう。

現代社会においては、当然ながら生が前提とされている。死は制度として管理されるが、それを選択することが肯定されることはない。

どれほど器に罅が入ろうとも、命を零すことは許されない。しかし得てして（だからこそとも言えるべきか）、命は器ごと擲たれてしまう。

人間を人間たらしめる意志のすべてに寄り添い、その在り方をせめて、衝動による「放擲」ではなく、意志を持った「訣別」にできないだろうか？



1-3. 揺蕩 遺言 /snow crystal

本計画の目的を以下に示す。

1. 死と向き合う
2. 自己と向き合い、自己を捉え直す
3. 進むべき道を自らの意志で選択する

ガスパールとは、この建築に訪れたものすべて。黄昏とは、自分を見つめ直すためのくらのやみの領域。しかしてそれはひかりとのあわい、その先にあるものであり、そのまた先にも光はある。

社会の喧噪から離れた静謐な空間で、何物でもない本来の自己を見つめ直す、内省的な空間を提案する。



2-1. 孤独内界 /meet suicide.

本計画の敷地は、静岡県浜松市に存在する湖である浜名湖北部に浮かぶ島、礫島とした。浜名湖は海と繋がっていることで湖内に海水が流入する巨大な汽水域、つまり陸海のあわいといえる。

礫島は、かつては各地の港から上陸することができたが、付近の港は閉鎖状態が続いている。

また、かつては緑豊かな島であったが、土壌が流出し続けており、現在では荒廃した岩肌が露出している。

社会的文脈から断絶され、少しずつかつての姿を失いつつあるこの場所に、積み重なる時間の中で存在し続けるものを計画する。



神性

空間が先にあって、神性はその後に定義されている

イチキシマヒメ
→航海安全の神

→灯台：ひかりを灯す

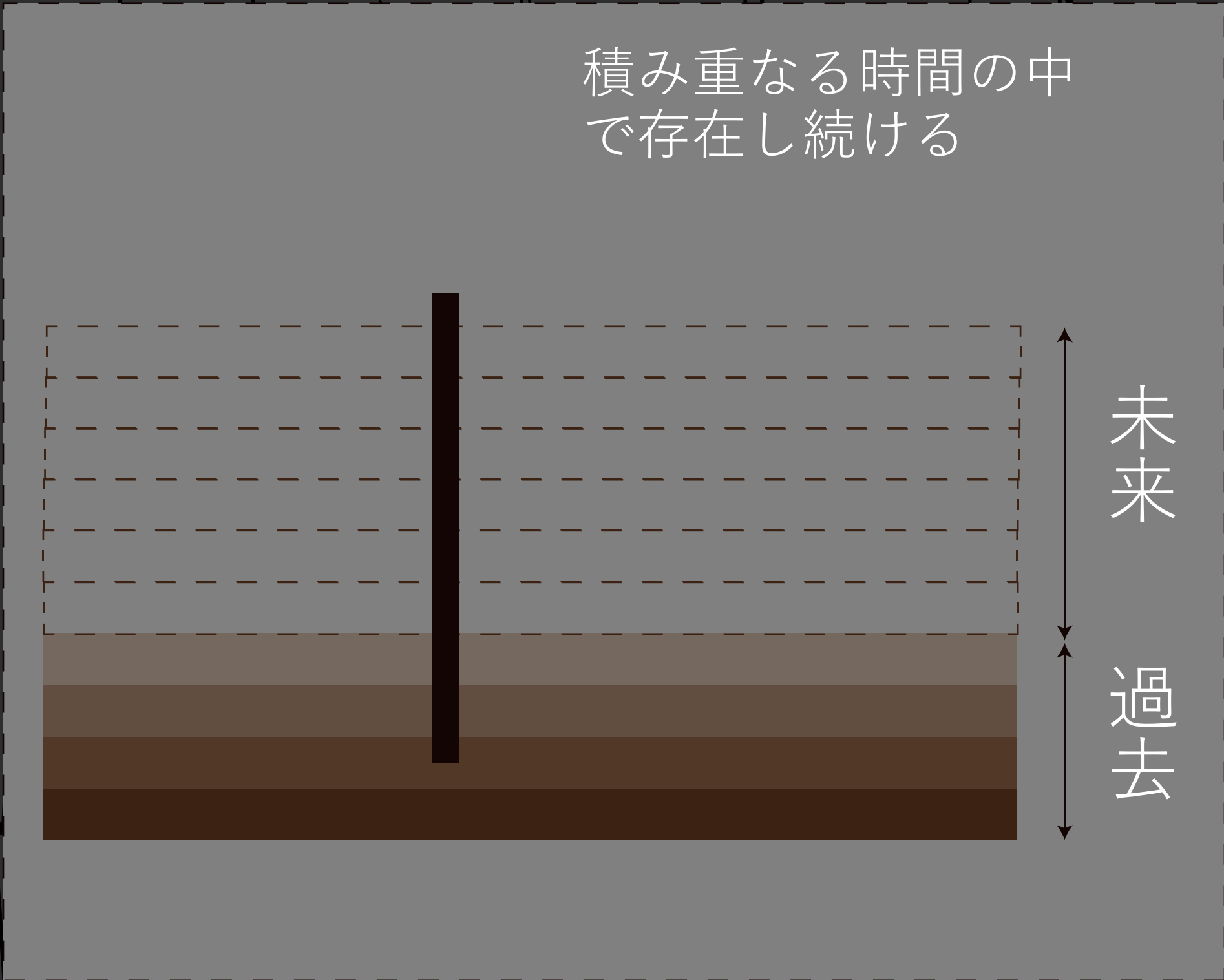
2-2. 虚構神性 /how to overcome destraction

日本においては、古くから森羅万象のあらゆるものに神性が宿ると信じられ、八百万の神と呼ばれてきた。

人間に恵みを与える一方、猛威も振るう自然現象という、人智の及ばない概念に神性を見出したのである。

建築は人間の生活 / 社会活動を支える基盤という点において、自然同様、人間の脅威となる強大な力を持ち得る。

これは人間の原罪ゆえに生まれ、人間が築いた社会基盤の上に立ち、人間が自らの意志により■■■■■■■■のための機能を以て、存在し続ける、人工の神性。



2-3. 空洞禁忌 /do not fall.

邂逅：大穴、地下へ：ひかりに導かれる

過密：社会の表徴：くらやみ、ひかり

記憶：客体化：窓からのひかり

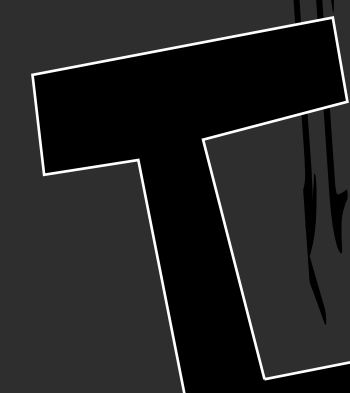
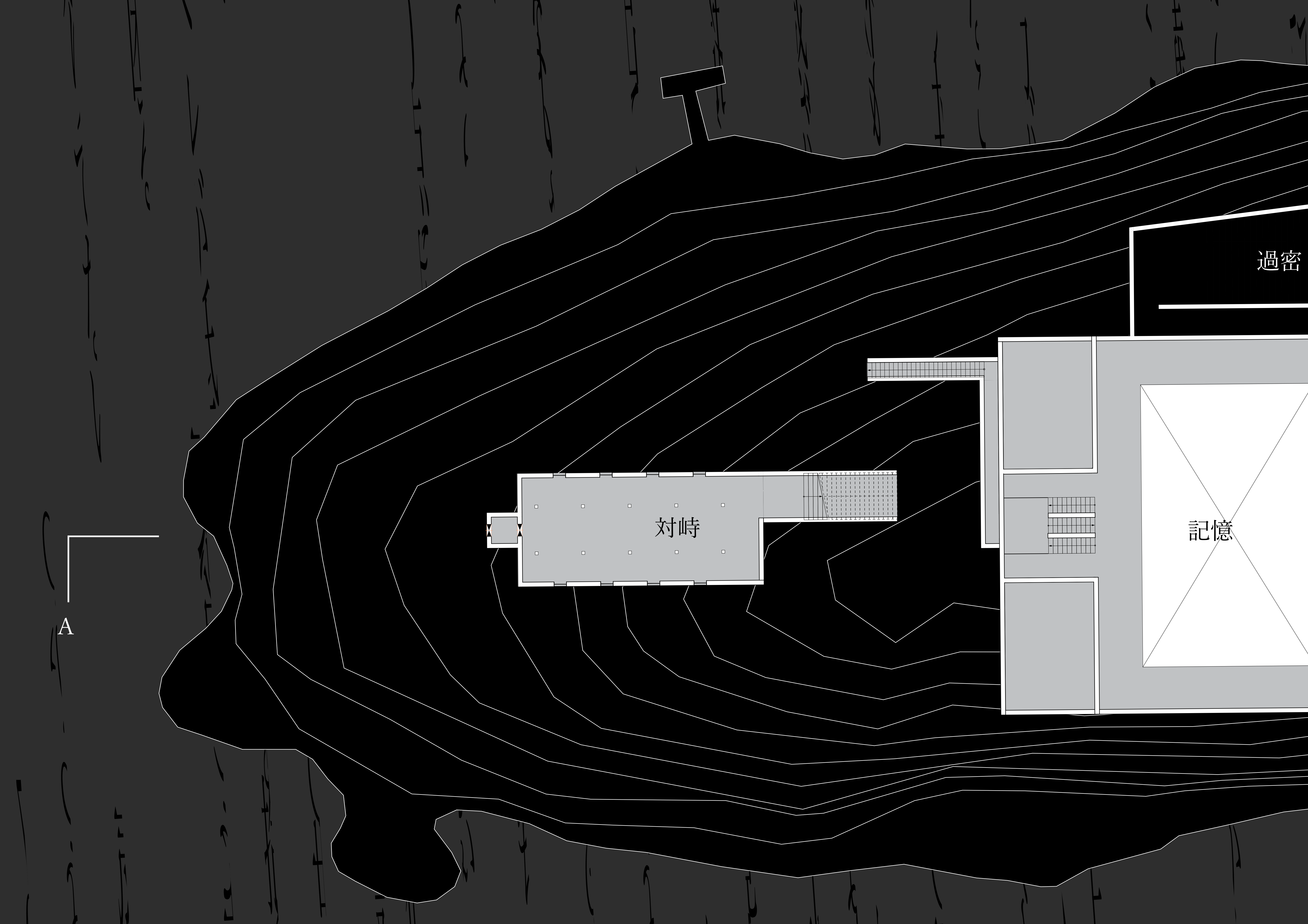
対峙：自分のための祈り：ひかり

塔：身体スケールからの脱却：ひかり

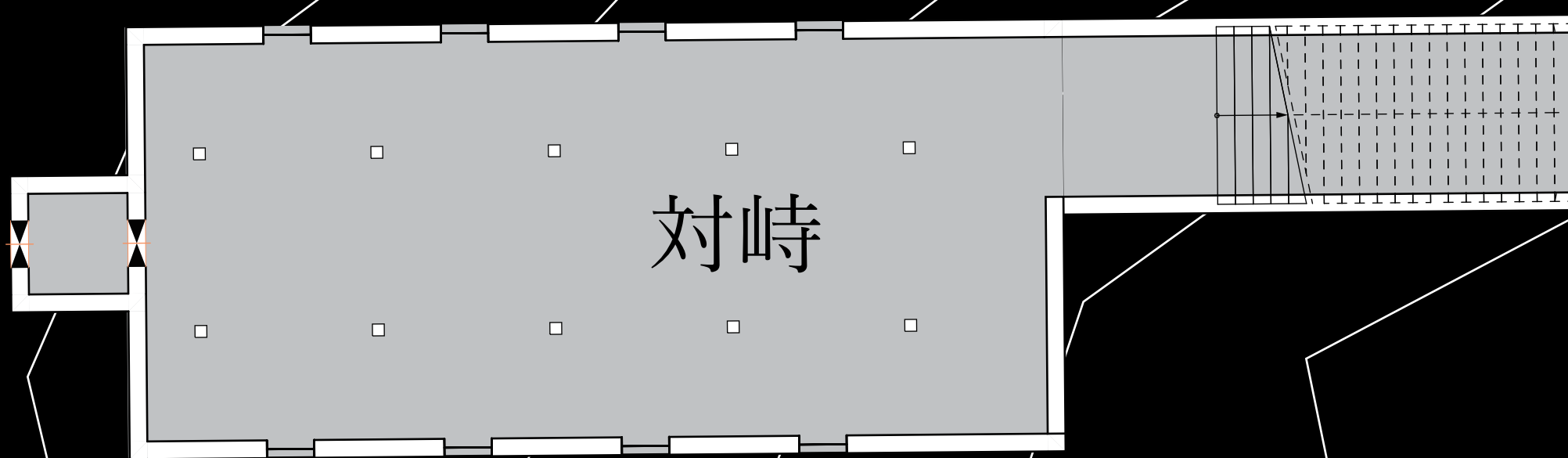
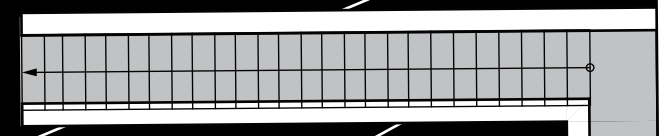
大穴：生の重さとしての長さ：くらやみ

地上をひかり、地下をくらやみの空間とし、地下においては導線をひかりによってみちびく、地上においては、スケールの大小を調整することで、身体スケールからの脱却を図る。

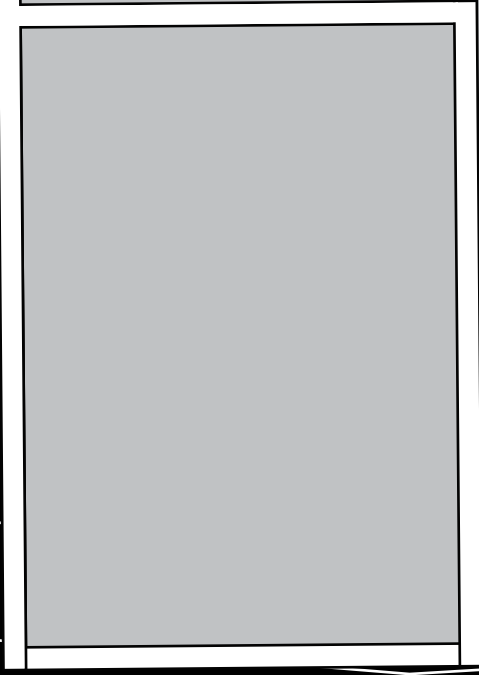
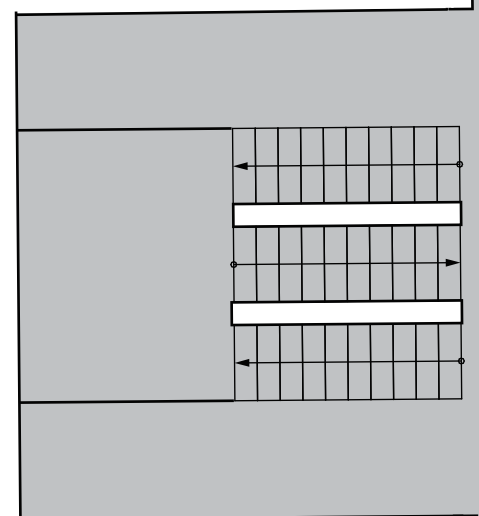
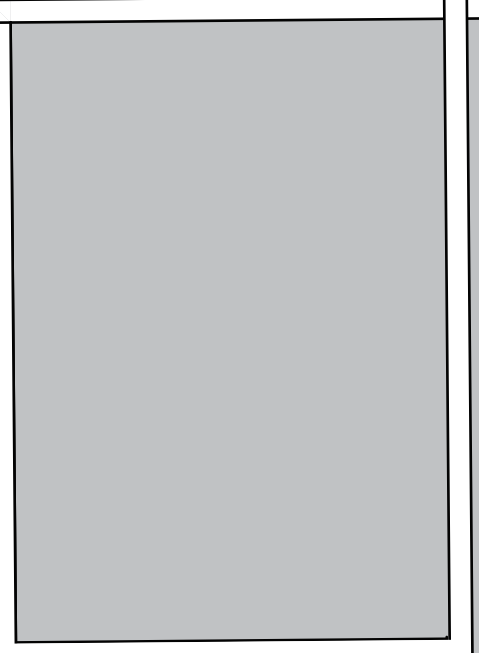




過密



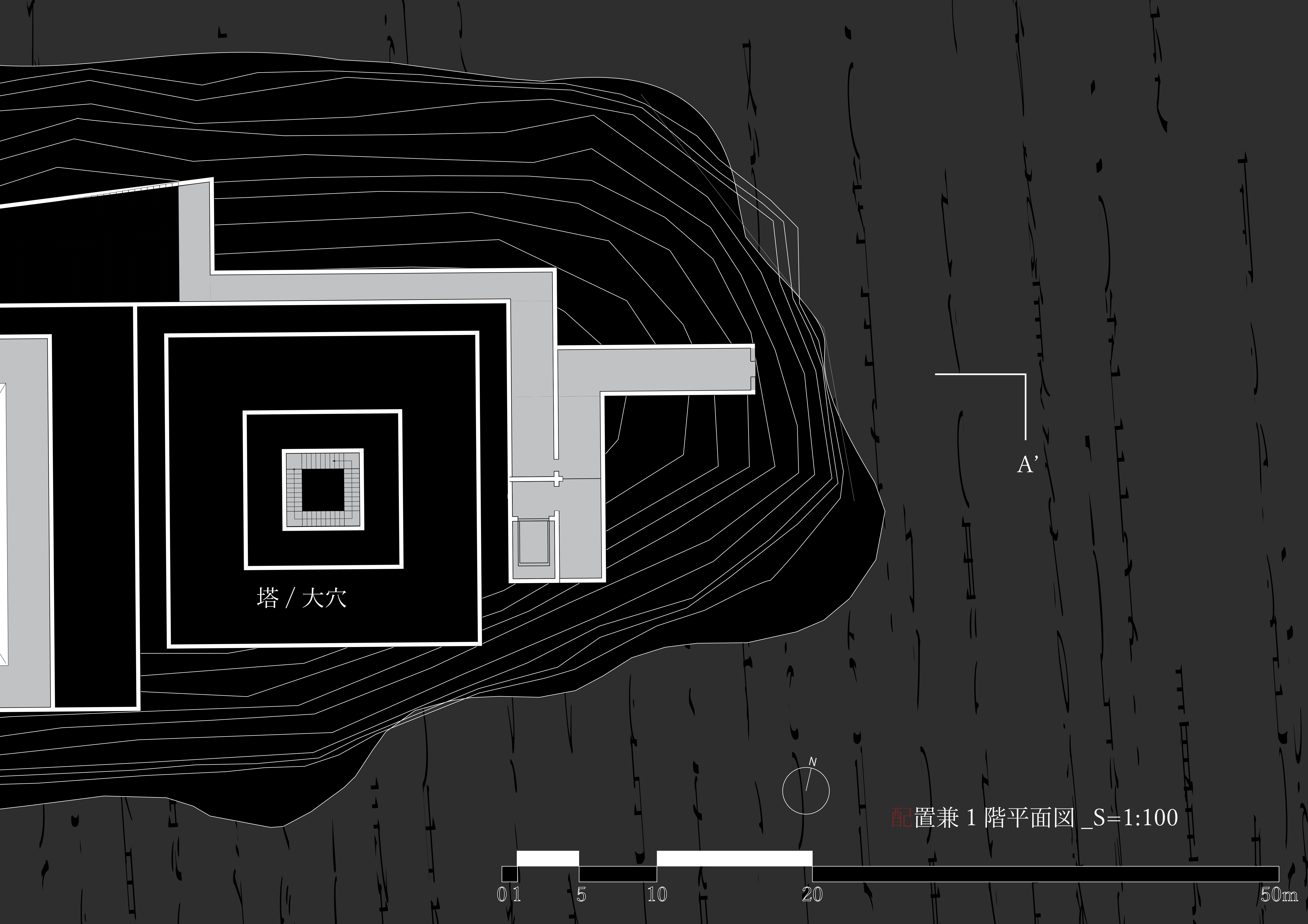
対峙



記憶



A

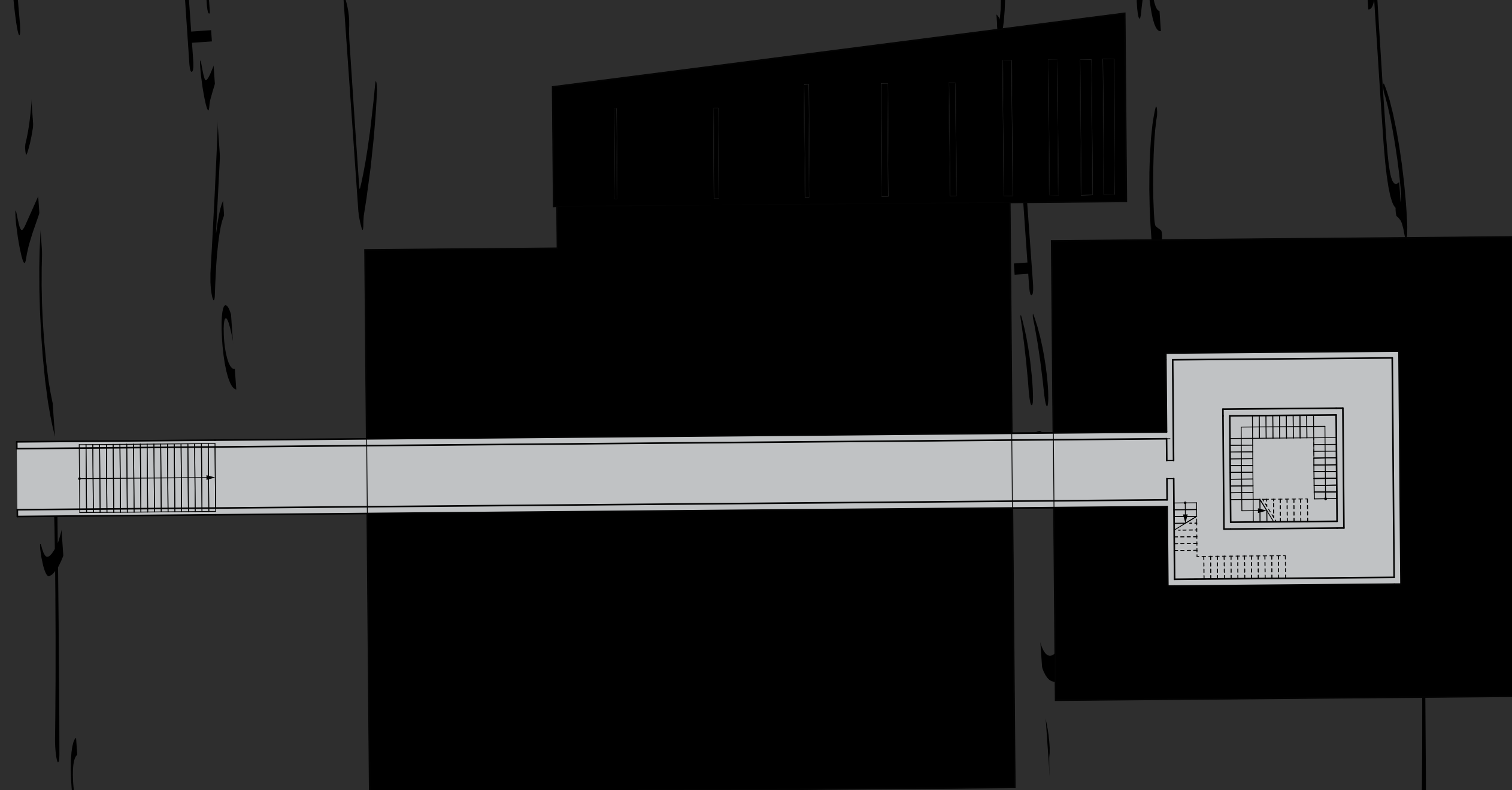


塔 / 大穴

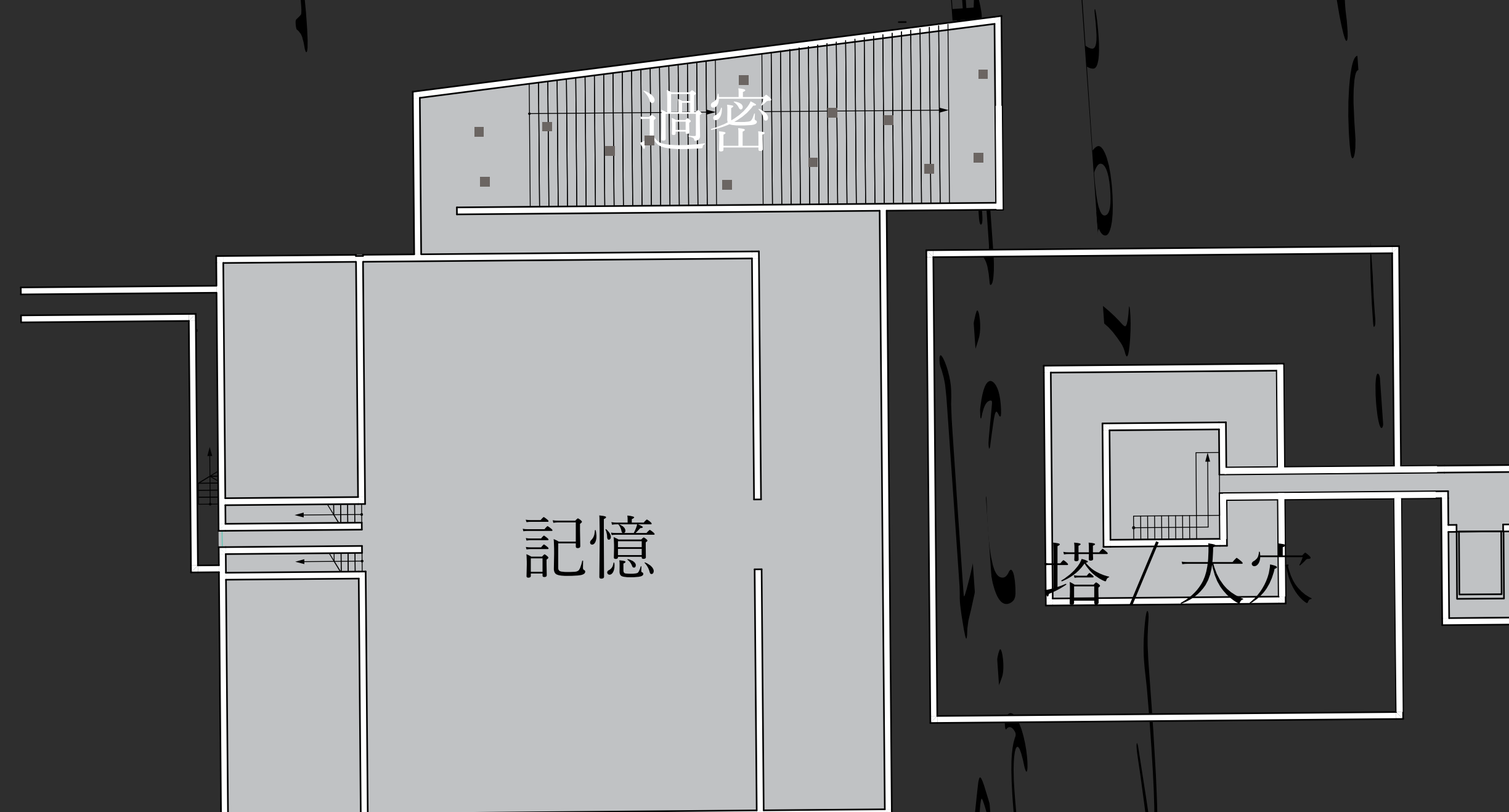
A'

配置兼 1 階平面図 _S=1:100

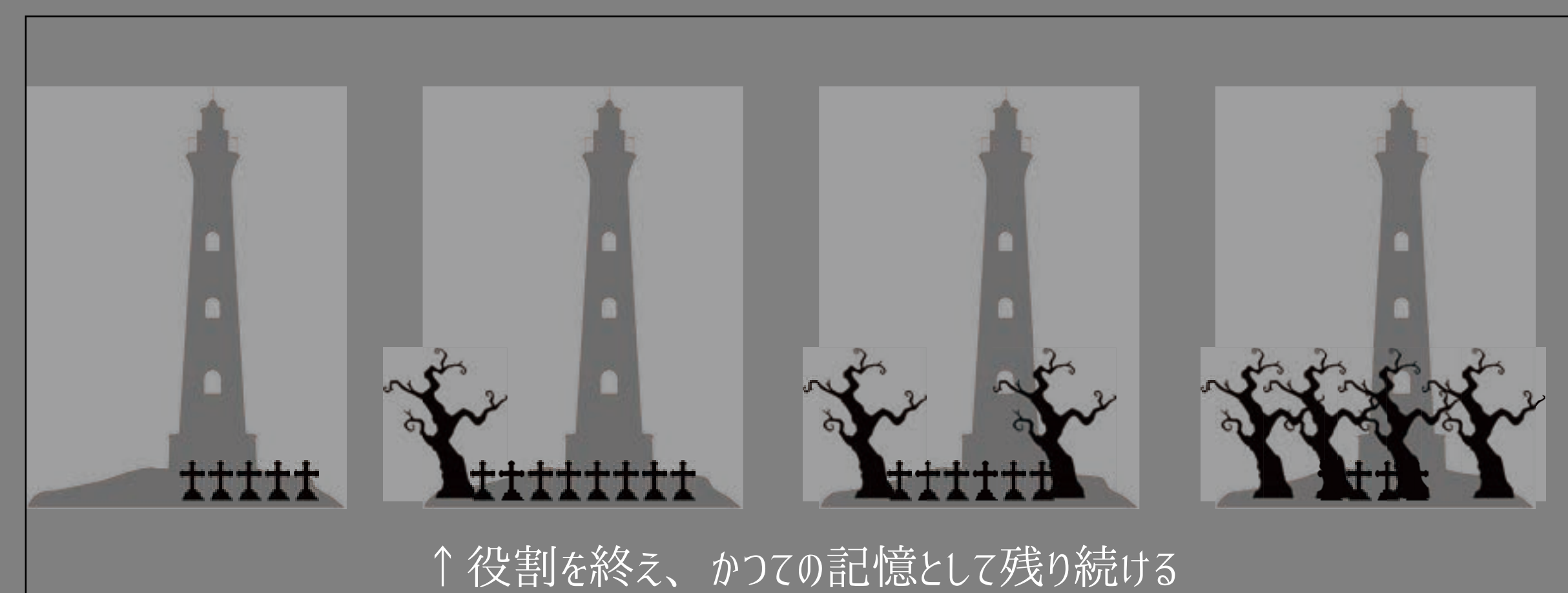
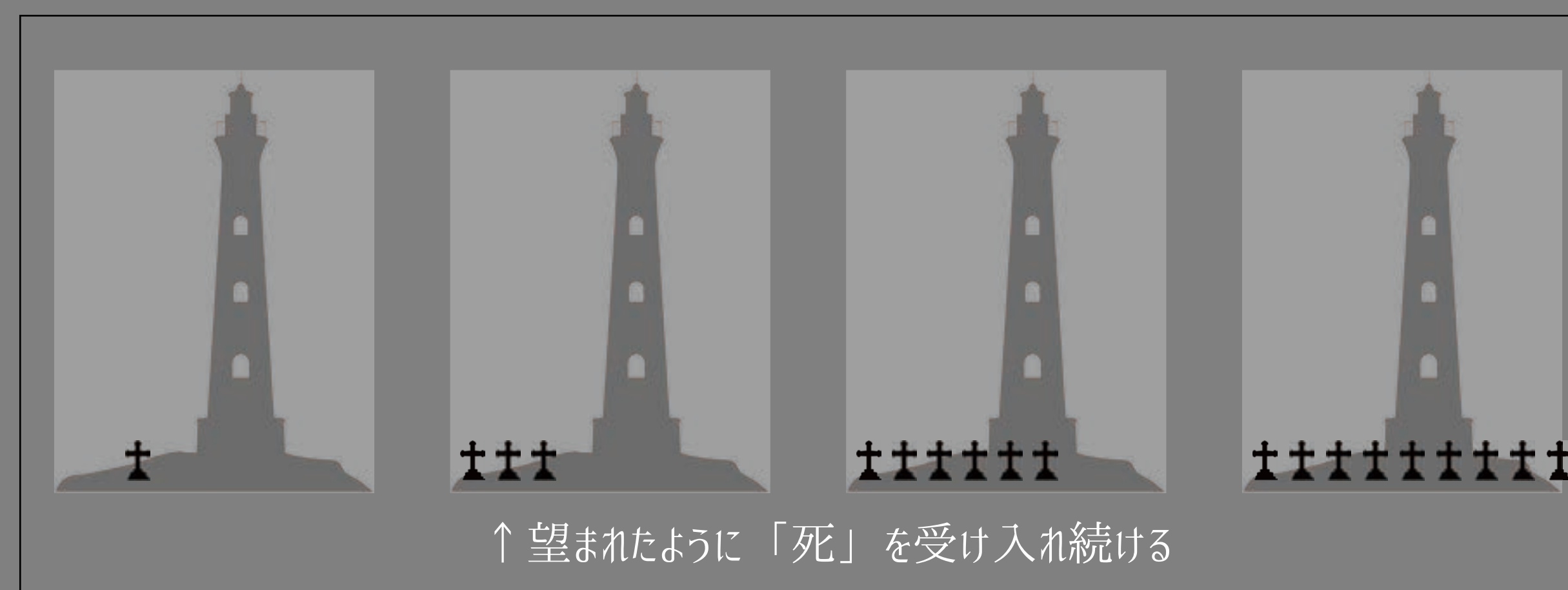




地階平面図 _S=1:200



2 階平面図 _S=1:200



2-2. 黄昏 継命 /Le Crépuscule qui revient

①希死念慮が増え続ける社会

他者の視線がさらに強まり、関係はますます途切れなくなり、個人が消耗していく社会が進行した場合、その機能を以て、社会の不条理、生き辛さを映し出す。

②自殺なき社会

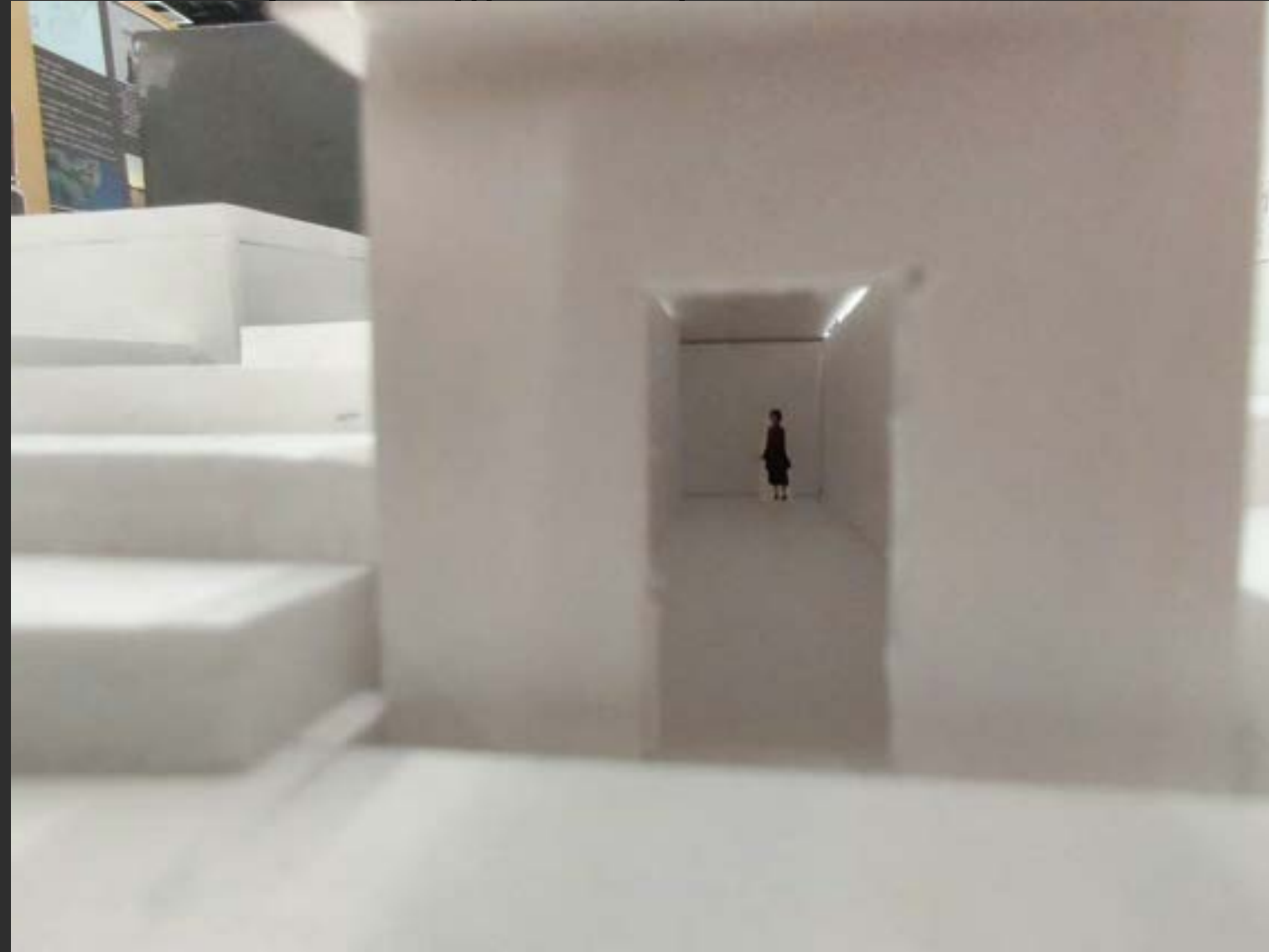
仮に将来、ケアの制度が整い、孤立が減り、自殺願望そのものが希薄になった社会が訪れたとき、この建築は役割を終え、「かつて人間が直面した問題」「それを克服したということ」の証明としてそこにあり続ける。



A-A' 断面图 _S=1:200

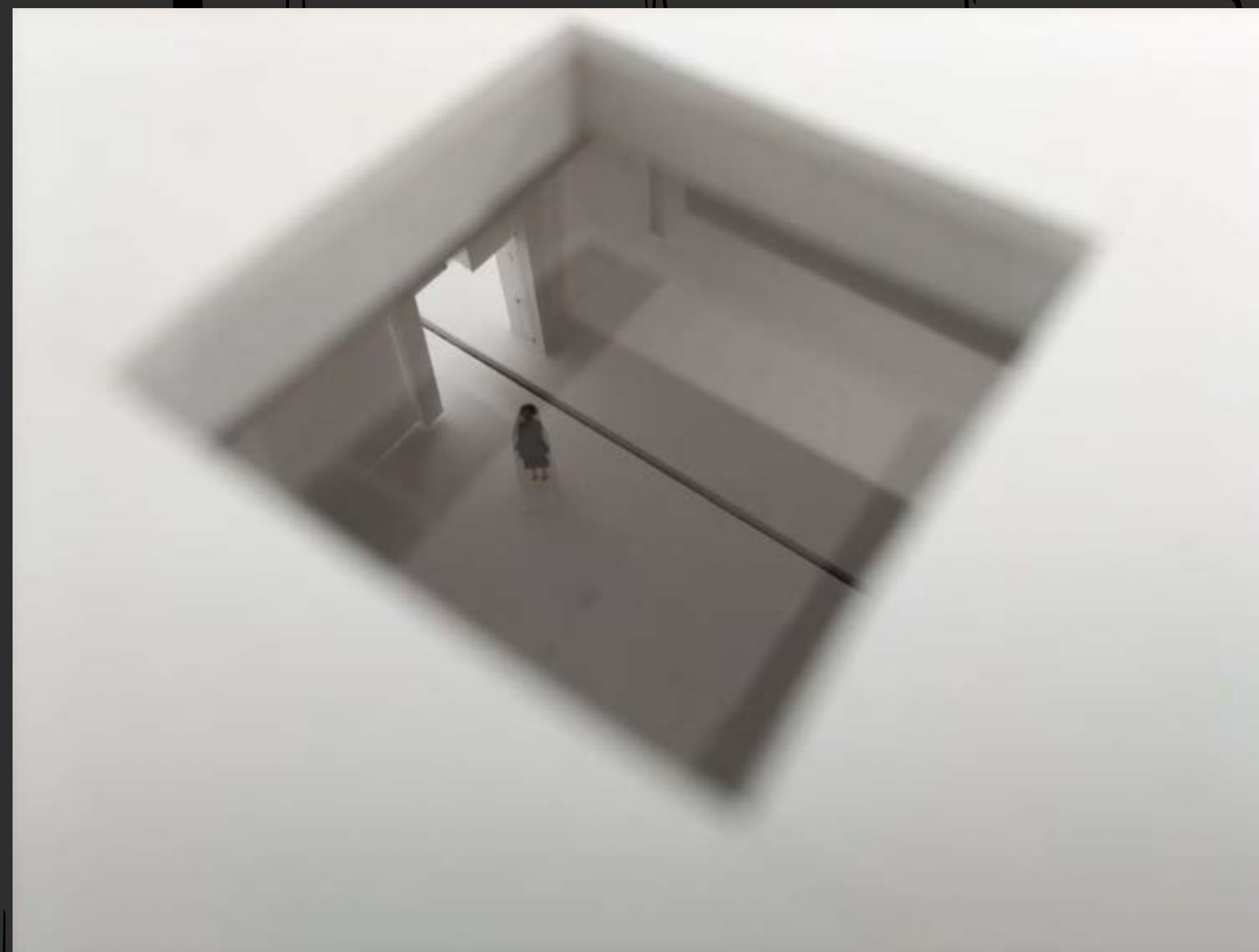
01_ 過密

地下へと下りていく「過密」の空間は、社会性を象徴する。人の気配を象徴する柱が乱立し、スリットから差し込む光は徐々に細くなっていく。



02_ 記憶

他人が遺した言葉、断片的な情報に触れることで、己に内在する価値観を整理し、自己を再構成していく。



03_ 対峙

祈りという行為を以て自己と向き合う
空間。
伸びる空間の先に何かを見る。



04_ 塔 / 大穴

日常から離れていく、白い塔。
日常へと戻っていく、黒い塔。

白い塔はいのちのあやうさ
黒い塔はいのちのおもさ

